

平成 27 年度 新技術・地域資源開発補助事業

市町村名	福岡県福智町	
事業名	伝統的工芸品「上野焼」を活用した高付加価値器製品開発	
企業等概要	企業等の名称	上野焼協同組合
	代表者氏名	理事長 高鶴 享一
	所在地	福岡県田川郡福智町上野 2811
	連絡先	0947-28-5864
	URL	http://www.aganoyaki.or.jp/

平成 29 年 2 月現在

【事業者概要】

千利休七哲のひとりに数えられる小倉藩主の細川忠興が開窯させた「上野焼（あがのやき）」産業の振興発展のため、13の窯元が組織している組合。上野焼陶芸館での展示販売のほか、陶器まつりや子ども陶芸教室を開催するなど、産地の活性化と上野焼の魅力発信に取り組んでいる。

【事業概要】

◇背景・経緯

上野焼は400年以上の歴史があり、茶陶としての評価は高く、国の伝統的工芸品にも指定されている。

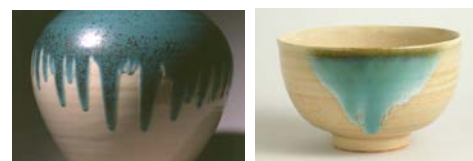
一方で、外観上、上野焼を強く印象づける特徴がなく、高価なイメージもあり、県外へその魅力を十分に発信できていなかった。上野焼をPRする最大のイベント「春の陶器祭り」と「秋の窯開き」の入込客数も年々減少していた。また、上野焼協同組合の若手で構成される青年部「巴（ともえ）会」も部員は4名と少数で、後継者も少なくなり、廃業する窯元も出てきている状況であった。

これらの現状から、町の総合戦略でも“上野焼の新しい挑戦”を一つの柱に位置付けており、伝統を残しつつ、新たな製品開発に取り組むことで、産地の活性化を図ることとした。

<上野焼の歴史・特徴>

上野焼の始まりは1602年。歴代藩主の御用窯として茶陶を作るものであった。徳川將軍家茶道指南役・小堀遠州ゆかりの「遠州七窯」のひとつにも数えられ、1983年に国の伝統的工芸品の指定を受けている。福智町の象徴である福智山の麓に窯元が数多く点在している。

茶陶として発展した上野焼は、他の陶器類と比べて軽くて薄づくりであるという特徴がある。多種の釉薬が使われていることも特徴。「緑青（ろくしょう）流し」と呼ばれる青色の釉薬や「総緑（そうろく）」と呼ばれる緑色の釉薬が代表的である。



上野焼の魅力に触れられる展示販売所「上野焼陶芸館」



伝統的な手作業と窯元の創意によって生み出される上野焼

◇研究開発の概要

茶陶独自の趣や手作り感といった伝統を残しつつ、日常使いを意識した器の開発に着手。近畿大学と連携し、コンセプトや利便性、デザインなどを研究した結果、上野焼を強く印象付けるために、伝統的な渦模様の陶印である「巴（ともえ）」を外観に反映。機能性や保温性を高めるために、マグカップは蓋付きとし、内側に特殊シリコンリングを装着した。焼いたときに土が伸縮するため、後付けのシリコンリングが入る溝の深さを考えて成形するなど、高度な技術を要したほか、いくつかの陶土をブレンドするなど工夫を凝らした。作陶当初は製品化率（歩留まり）が3割程度にとどまった（現在は7割程度の製品化率）。



蓋の内側にシリコンリングを装着

【成果】

◇商品化・販売先

伝統的な「巴」のデザインを蓋や持ち手に反映させた、新たなブランド「巴ライン」として、蓋付きマグカップ2種類とフリーカップ3種類を商品化。マグカップは高級感を出すために木箱入りで販売。フリーカップは持ちやすくデザインしている。上野焼陶芸館で展示・販売しているほか、ふるさと納税返礼品に登録したことで、東京や大阪などの都市部への知名度向上に繋がっている。



今回開発したマグカップとフリーカップ。
釉薬を変えた5種類を商品化

◇地域性・特徴

蓋付きマグカップは保温性に加え密封性が高まり、飲料の香りや風味を保つ機能性に優れた商品に仕上がった。また、窯元にとっても、唯一無二である陶印「巴」の重要性を再認識する機会となったほか、新しいことに挑戦したことは産地全体の士気向上に繋がり、秋の窯開きでは過去最高の人出と売上を記録した。



過去最高の人出で賑わった秋の窯開きでも開発品をPR

【今後の展望】

今後は、価格設定が課題と考えており、よりリーズナブルな価格となるよう製品化率の向上を目指す。また販路拡大のため、福岡を中心に活動するシェフ集団「NPO法人博多ミラベル」と連携したレストランでの展開や、福智町役場赤池庁舎を改装して今春オープンする「ものづくり体験工房」での展示など、更なる上野焼の魅力を全国に発信していく。